# 死顔

中村真一郎

新潮社版

死顔

一九七八年八月三〇日発行
一九七八年一一月一五日二刷
著者 中村真一郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話 業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替東京四一八〇八
金羊社印刷、植木製本
定価九八〇円

© 1978 Shin'ichiro Nakamura
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

# 中村真一郎作品集目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

現代の宿り木……7
不意の訪れ……31
愛と固着……85
家鴨の世話……111
死顔……131
偽青髯……173
あとがき 201

装画

上野憲男

中村真一郎作品集

# 死　顔

# 現代の宿り木

## 或いは親和の領域

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その日まで彼はその男――銀座裏に小さい画廊を開いている四十男――に、特殊な関心を抱いていたわけではなかった。

その画廊からは時々、新しい展示会の通知などが舞いこんでくるが、彼はわざわざ出掛けて行ったことはない。そしてその男とは、数年前にある酒場で、彼の連れの大学教授から紹介されて挨拶した、その程度の知り合いに過ぎなかった。その時、先方から、「女房が以前、お世話になりましたそうで……」といきなり云われて、彼女の独身時代の遊び相手であった彼は、どのくらいまで自分とその女とのつき合いについて、その画商が知っているのか見当がつかないので、曖昧な返答をして逃げ出したことだった。

しかしその細君とも画商はその後、間もなく別れたという噂を聞いた。その離婚によって、(妙なことであるが)心理的には彼は画商との仲が、一段と遠くなったように感じていたのである。

それが、その朝、突然に電話で寝込みを襲われた。半睡半醒の状態で、ベッドにあお向けにな

ったまま、受話器を耳にあてた彼は、相手がその画商であると気がついた直後に、その日の昼前に、彼の画廊に新着のシャガールの挿絵本を観に行く約束をしてしまった。どうせ午後には仕事部屋に行く必要があるのだから、その前に、以前から評判を聞いていたシャガールの挿絵というのを観るのは、別に面倒なわけではないが、そのまま起きて台所で朝食の卓につき、さて、寝不足の頭で考えてみると、彼は先程の電話で相手の馴れなれしい口調に乗せられて、自分の方もつい親しい口をきいて、うかうかと出掛けて行く約束までしてしまったことに改めて気付き、画商などという職業の男は、あのように未知同然の人間に対しても、臆せずに物を云うものなのか、と思い当った。そして、何故ともなく、相手のペースにまきこまれた、という軽い忌々しさを感じたことだった。

昇降機の扉が開くと、眼のまえにその画廊の入口があって、目ざとく彼を見付けた画商は、受付のところから立ち上がり、そして片手を挙げて声をかけると、その手をそのまま彼の肩に廻したのには驚いた。

大体、彼はそのような肉体的接触を同性の人間と持つことに、気まずさを覚えるたちである。特にその男の頭髪から立ち昇った強い化粧水の匂いが鼻先をかすめたのだから、その気まずさは、生理的な薄気味悪さにまで生長した。そのような親愛感の表現のしかたをする人間は、彼の交際圏には従来ひとりも現われたことがなかったのに、——と彼は画商の腕に押されて、奥の部屋に

拉致されながら、心細さと違和感とを同時に感じてきた。

……シャガールは予想以上で、思いがけないことは強い迫力をもって、紙から絵があふれそうに大きく見えたことだった。それは幻想的な可憐さというような、昔からの印象を焼きつくしてしまうほどの、画家の宗教的情熱の恐ろしい燃え上がりであった。

彼は軽いめまいを覚えて、革のソファに深く凭れかかり、黙って眼を閉じていた。

「本物はやっぱり比較にならないでしょう」と、低い卓の向う側から、画商が話しかけてきた。一瞬、彼はシャガールが何と比較してどうなのか、ととまどった。それから、そのめまいの続いていた短い間に、画商がひとりの日本の版画家の名前を発音していたことに気付いた。その版画家はよく批評家からシャガールに比較されていることも、咄嗟に思い出された。

その版画家とは彼は一度、顔を合わせて名乗りあったことがある。それもこの画商と初めて挨拶したあの晩の酒場で、版画家は同じ卓に坐っていて、画商が紹介の言葉を述べると、赤く濁った眼で彼を睨めつけるようにして、黙ってかすかに首を動かしたのだった。

「あの山猿に彼は夢中になっていてね。とうとう家に引きとったので、細君が嫌がっているという話だ――」と、その時、酒場の扉の外の廊下に出ると、直ぐ大学教授が教えてくれた。「大体、あの画商は天才崇拝癖があってね。ひとりの画家に凝ると、盲目的になってしまう。あの山猿はどの程度の才能か知らないが、とにかく木賃宿みたいなところから彼が引きとって、自分の家で仕事をさせているらしい。今まで碌に絵が売れない男だったから、お蔭で食う心配がなくなって、当人には都合がいいだろうが、画商の細君はどうしても、あの野蕃人と一緒に暮すのは御免だと

悲鳴をあげているらしい」
教授はそう説明してくれた。だからその直後に、その細君が画商の家から出て行ったと聞いた時、なるほどあの気取りやで社交的な女は、口の重い傲慢そうな版画家に、とりつくしまがなくて息がつまり、家から押し出される結果になったのだな、と彼は納得したのを、その時、改めて思い出した。
しかし、いわば細君を家から追い出してまで保護を加えていた版画家を、シャガールに比べて軽く見下しているような、この画商の今の口調に、彼はうっかりと相槌は打てないぞと思った。自分の愛する存在を、故意に他人のまえで悪く言ってみせるという性癖の人間も、世間には少くはなく、そういう時、吊られて同調すると、あとでひどく怨まれるということも、ないわけではない。そこで彼は咄嗟に思いついたようにして、論点をずらすことにした。
「そう云えば、彼はお宅にアトリエを構えて仕事をしているんですってね、大変ですね……」
急に相手の声が、いわばこわばったようになったのが判った。
「いや、あの男には、もう出て行ってもらいました。もし、あなたのところへ絵を売りに行っても、相手にならないで下さい」
その見幕に気押された彼は、思わず口走った。
「でも、あなたは彼の熱心なパトロンだったんじゃないんですか」
すると相手は急に立ち上がって、彼の傍らに席を移した。そして、片手を彼の膝のうえに置いた。またもや、苦手な肉体的接触である。

「いや、あの男は、一緒に暮してみて判ったんですが、まあ一種の気ちがいの部類ですねえ。モノマニヤ、偏執狂、そして同時に誇大妄想狂……仕事をはじめると、朝食の食卓で話し掛けようものなら、気分を中断されたといって、私の顔に食べかけのパンをぶつけるんですからね、恩人の私にですよ。率直に云いますが、あれは普通の神経の持主とは、どこか微妙に違っているんじゃないかと、私がそう考えたとしても、無理はないとあなたも思われるんじゃないか、——と、まあ私が云ったとしても、あなたは反対できないんじゃないですか」

彼は相手の昂奮がたかまるとともに、その云い廻しが奇妙に迷路じみて来ることに気付き、そして、肯定と否定とが慌だしく入れ替る、その話しの筋道に追いついて行けなくなってきた。——といっても云いすぎではないと、読者は考えるだろうと作者がここで想像したとしても、反対はできないのではなかろうか——と、まあ作者もつい画商の口振りを思い出して、伝染しそうになってきたが、その時の彼も相手の話の糸口を摑みそこないかけて、茫然となってしまったのである。いや、それより、彼の注意を話から外らそうとでもいうように、画商の指先が彼の膝のうえで、機械的にピアノの鍵盤をたたくような運動を続けているのが、神経に響いて落ち付きがなくなってきた。

そこで彼は急に立ち上がって、洗面所へ逃げこみ、ゆっくりと手を洗いながら鏡をのぞいてみると、自分が今朝、いきなり電話で中断させられて、睡眠不足になっているのが、顔の表情に露骨に浮び出ていることが醜く目についた。それにあの肉体的接触癖の被害者となることからは、匆々に逃げ出した方がいいぞ、と彼は心に構えながら、重い足取りで部屋に戻ってきた。

彼が立ったままで、「きょうは、結構なものを見せていただいて、どうも有難う」と云いかけると、画商は慌てて引き留め、そして部屋の隅の机のまえに坐っている秘書らしい女性に、紅茶をいれてくるように命じた。

そこで彼は今度は、最初に画商の坐っていた側、つまり相手が今、腰を下している席と向い合わせの入口に近い方のソファに、軽く尻を載せた。いつでも中座することができるぞという彼の気持を、その坐り方によって暗示したわけである。

「いや、私はもう神経的に耐えられないところへ来ていたんですよ——」

と、画商は彼の顔を覗きこむようにして、話しつづけた。

「いや、率直に云いますが、やはり彼は気ちがいの部類に編入されても文句の云えない人間ですな。私の女房がでて行ったのは、女性特有の敏感さで、あの男の異常さを嗅ぎつけたわけだったんでしょう。あの気狂い独特の体臭のようなものをですな。……それに、ただ粗暴だけならいいんですよ。そのうえ、金にきたないときている。それも病的にですな。一人前の男が、ちゃんとした収入があるようになって——それも、この私のお蔭ですよ、その収入のほとんどは、私のこの店での版画の売りあげなんですから——とにかく月末ごとに私が渡す金を、彼は涼しい顔をしてポケットへ収めてしまうと、月々の部屋代や食費さえ払おうとしない。人間的な誇りというものが全くないんです。そのくせ傲慢さは、果てしもないくらいに、エスカレートしてきていたんですからね。人を召使い扱いして……」

自分で無理に引きとっておいて、気が変ったとなると、今度は部屋代だ、食費だと云いだすと



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.